

グローバル人材の育成をめざした留学生交流活動の開発

—「主体性・積極性」「チャレンジ精神」に焦点をあてて—

君岡 智央 森田 水加穂 掛 志穂 中山 芙充子
米倉 智久 松宮 奈賀子 児玉 真樹子

1. 背景と目的

本研究は、幼稚園におけるグローバル人材の育成をめざした留学生交流活動を開発することを目的とする。特に、グローバル人材の育成に必要である「主体性・積極性」「チャレンジ精神」に焦点をあてることとする。

岩田(2015)は、「近年、世界的にグローバル化は刻一刻と進展している。その一方で、持続的な成長と生産性向上を実現するための鍵を握るのが人材の育成と活用である。その人材の育成の基盤を担っているのが、まさに学校教育であり、その進むべき方向性や具体策が現在議論されている渦中である¹⁾」と述べている。これは、世界がグローバル化に進む中、学校教育においてもそうした流れに対応できる人材育成となりうる取り組みを行っていく必要がある、その方法を探っていくかなくてはならないことを示しているのである。

グローバル化とは、「(前略)情報通信・交通手段等の飛躍的な技術革新を背景として、政治・経済・社会等あらゆる分野で『ヒト』『モノ』『カネ』『情報』が国境を越えて高速移動し、金融や物流の市場のみならず人口・環境・エネルギー・公衆衛生等の諸課題への対応に至るまで、全地球的規模で捉えることが不可欠となった時代状況を指す(後略)²⁾」とグローバル人材育成推進会議(2012)が定義している。更にグローバル化した世界の経済・社会の中にあって、若い世代に育成すべき「グローバル人材」の概念についても次のように整理している。要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する

理解と日本人としてのアイデンティティ³⁾、である。広島大学附属学校園研究推進委員会(2014)は、初等中等教育段階においても上記の要素の育成を目指し、広島大学の各附属学校園のグローバル人材育成に向けた実践とどのように対応しているかを明らかにしている⁴⁾。このことから今後、学校教育においてグローバル人材を育成していく際、要素ⅠからⅢにある項目に焦点をあてた活動を行っていくことが求められると考える。

本園では社会のグローバル化を見据え、2003年度から広島大学の留学生と交流活動を行い、実践を積み重ねてきている。この留学生交流活動を通じ、次の3つの力の育成に取り組んできた。多文化を理解する力、自国の言葉で自己表現する力、いろいろな人と積極的にかかわり、コミュニケーションする力である。これにより、子どもたちが留学生とのふれあいやいろいろな国の文化に出会うことを楽しんだり、自分と他者の違いなどに気づいたりする姿が見られるようになった。こうした取り組みは、「コミュニケーション能力(要素Ⅰ)」や「異文化に対する理解(要素Ⅲ)」にあたるものととらえている。しかし、これまでの留学生交流活動の内容を見直した時、次のような課題が残った。それは、留学生とうまくコミュニケーションがとれなくとも、自分なりに考えた方法で積極的にかかわってみようとする活動に至っていないということである。

そこで本研究では、前述した状況下にあっても子どもたちが留学生に自らかかわっていくために必要と思われる「主体性・積極性(要素Ⅱ)」、「チャレンジ精神(要素Ⅲ)」に焦点をあて、グ

ローバル人材の育成をめざした交流活動の開発に取り組むことを目的とした。具体的には、留学生と言葉が通じ合わなくとも、子どもたちがいろいろな方法を考えて自分の思いを伝えていこうとする場や交流活動の中で生じた課題に対し、自分なりの方法で粘り強くチャレンジする場などを取り入れた交流活動を開発していくことをめざす。

2. 「主体性・積極性」「チャレンジ精神」のとらえとめざす子ども像

グローバル人材育成推進会議が整理した「グローバル人材」の概念は、主に青年期の若者を対象としたものであり、幼児期の子どもたちを対象としたものではない。また、明確な定義付けもなされていない。したがって、本研究において焦点をあてた「主体性・積極性」「チャレンジ精神」について、幼児期の子どもたちを対象とした「とらえ」を設定する必要があるのではないかと考えた。

改めて主体性、積極性、チャレンジ精神を調べてみると、大辞泉（1998）において「主体性」とは、「自分の意志・判断で行動しようとする態度⁵⁾」と示され、「積極性」については、「進んで物事を行おうとする性質⁶⁾」と示されている。これらのことから、「主体性・積極性」は誰かに促されて行動するのではなく、「自分で決めて自分から行動する」ととらえることができるのではないだろうか。これを留学生交流の視点から考えると、「留学生に自分からすすんでかかわっている」ととらえることができるだろう。

一方で、チャレンジ精神にある「チャレンジ」は、大辞泉（1998）において「挑戦すること⁷⁾」と示されている。留学生とコミュニケーションがうまくとれないなど交流活動で様々な課題が生じた時、子どもたちがいろいろな方法を考え、意欲的に試していく姿は、まさに挑戦している姿であると考えられる。このことから、チャレンジ精神を「留学生交流活動の中での課題に対し、いろいろな方法を考えて試している」ととらえることができるのではないかと。

また、幼稚園教育要領（2008）は、幼稚園教育について「幼稚園教育が目指しているものは、幼児が一つ一つの活動を効率よく進めるようになることではなく、幼児が自ら周囲に働き掛けてその幼児なりに試行錯誤を繰り返し、自ら発達に必要なものを獲得しようとする意欲や生活

を営む態度、豊かな心をはぐくむことである⁸⁾」と述べている。これは幼稚園において、子どもたちが周囲にあるものや人に進んでかかわり、考えたり試したりすることを大切にしながら保育を行うことが重要であることを示している。留学生交流活動においても留学生に子どもたち自らかかわっていけるようにし、交流する中での様々な課題にも子どもたちが意欲的にいろいろな方法を試していけるような活動内容にしていかなくてはならないだろう。

更に、グローバル人材を育成するための留学生交流活動を開発していく場合、他国の人と異なる言語を乗り越えて関係を築いたり、相手の立場に立って互いを理解したりしていくという視点に立つことが必要だろう⁹⁾。また、個人や社会の多様性を尊重しつつ、主体的に課題を解決していくという視点に立つことも必要だろう¹⁰⁾。

これらのことを考慮して、幼児期の子どもたちの「主体性・積極性」「チャレンジ精神」を次のようにとらえた。

【主体性・積極性】

- ・言葉が通じなくとも、留学生に自分から進んでかかわっている
- ・留学生のことを考えながら、自分から進んで行動している

【チャレンジ精神】

交流活動の中での課題に対し、いろいろな方法を考えて試している

グローバル人材の育成をめざした留学生交流活動を開発していくために、「主体性・積極性」「チャレンジ精神」のとらえから、めざす子ども像を次のように設定した。

留学生に自分からすすんでかかわったり、留学生のことを思い、自分たちなりに考えて行動したりする子ども

3. 本研究での留学生交流活動

めざす子ども像に向かうため、交流活動で留学生が子どもたちにかかわる際は、日本語を話すことができても母国語で話しをしてもらう。その際、交流活動の中で場面設定を行い、「主体性・積極性」「チャレンジ精神」に関する具体的な姿も設定した（表1）。

表1 主体性・積極性、チャレンジ精神に関する具体的な姿

| 場面 | 主体性・積極性、チャレンジ精神に関する具体的な姿 |
|---|--|
| 日本語が通じない留学生と出会う。 | ① 自分たちの言葉が留学生に通じないとわかっていても、一緒に遊ぼうと思っ てすすんでかかわっている。 (主体性・積極性) |
| 留学生が困った表情をしている。 | ② 留学生が困っていたら、「どうしたの？」などと尋ねながら自分からかか わっている。 (主体性・積極性) |
| | ③ 留学生が困っていることを解決しようと自分なりに考えて行動している。 (チャレンジ精神) |
| 言葉の違いから留学生に自分の思い や考えなどが伝わらない。 | ④ 自分の思いや考えなどをわかってもらうためにいろいろな方法を考え、実 際に試している。 (チャレンジ精神) |
| 留学生から「日本の子どもたちの遊 びや歌が知りたい」という話がある。 (年長を中心に) | ⑤ 「日本の子どもたちの遊びや歌が知りたい」と思っている留学生に対し、 どの歌や遊びがよいか、またどうやって教えるかを自分たちで考えてい る。 (主体性・積極性) |
| | ⑥ 選んだ歌や遊びを自分たちで考えた方法で教えている。 (チャレンジ精神) |

本研究では、表1にあるような場面をあえて設定する中で、主体性・積極性、チャレンジ精神の育成をねらいたい。

4. 研究の方法

(1) 対象児

本園全園児（男児52名 女児43名）

(2) 期間・場面

期間は、平成27年9月から平成28年2月までの間に留学生交流活動を5回行う中で、教師が表1にある場面を設定する。

(3) 検証の方法

表1にある場面を留学生交流活動の中で設定した時の子どもたちの様子を記録し、実践事例として書き起こす。その実践事例を基に教師自身が考察を行い、開発した留学生交流活動の成果と課題を導き出す。

5. 実践事例

実践例1

第1回交流（9月）：年長

場面：日本語が通じない留学生と出会う

【背景】

初めて園に来た留学生が保育室に入室する。子どもたちは、自分の好きな遊びをしており、留学生が保育室に入室してきても関心を示していなかった。留学生とは事前の打ち合わせの際に、母国語のみで子どもたちとやりとりすること、留学生からも積極的に子どもたちにかかわってほしいことをお願いした。

「私は〇〇」（自己紹介）

お花紙を使って花飾りを作る子どもたちが

いるところに、留学生が椅子に手をかけ、インドネシアの言葉でA児に話しかけている。どうやら「座ってもいいか？」と聞いているようである。A児は少し困った表情をしながらもゆっくり頷く。留学生が花飾りを指差しながら話しかけている。するとA児が、少し戸惑いながら花飾りを見せる。そして、留学生がA児の名札に手をかけるとA児が自分の名前を伝える。その様子を見たB児とC児が留学生の近くにやってくる。留学生がC児の名札に手をかけると、B児がC児の名前を伝える。更にB児が「私は〇〇」と名前を伝える。留学生がB児の名前を言い返すが、うまく言えてないため、B児が何度も自分の名前を伝えている。今度は、留学生が自分の名札をもって一文字ずつ名前を伝える。A児、B児、C児が揃って笑顔で留学生の名前を呼ぶ。更にD児とE児もやってきて自己紹介を始める。F児とG児がやってくると留学生が名前を伝える。留学生がG児の名札に手をかけると、とまどっているようである。その様子を見たF児が、「名前教えてだって」とG児に伝えるとG児が納得したように名札を見せながら自分の名前を伝える。

【背景】

H児やI児が遊んで帰ってきた後、保育室でいつものように絵本を見ている。そこへ、留学生がやってきて、H児がどんな絵本を見ているのか興味深く覗き込んでいる。

「ねえねえ、見て見て！」

H児が「ねえねえ、見て見て！」と嬉しそうに留学生の手を引いている。そして、日本語で

一生懸命、絵本の内容を伝えている。留学生が、H児にマレーシアの言葉で絵本の絵を指差しながら話しかける。何かを尋ねているようである。これに対し、H児も指を差しながら日本語で説明をし始める。それを見たI児も絵本を見せ、指を差しながら絵本の説明をし始める。子どもたちが指を差しながらしている説明を聞き、留学生が頷いている。子どもたちはマレーシアの言葉がわからないはずだが、留学生との間で会話が成立しているようである。

【考察】

留学生は子どもたちと母国語のみでやりとりをしないとイケない状況の中、ものに手をかけたり、指差ししたりしながら伝えたいことを伝えようとしている。これにより子どもたちは、聞き慣れない言葉で話しかけられても、留学生が何を話しているのかを推測することができるため、自己紹介や絵本の内容について自然な形でのやりとりが生まれたのだと思われる。更にその様子を見た周りにいた子どもたちも、言葉が通じないとわかっていても留学生に自らかかわっていったのだと思われる。留学生がものに手をかけたり指差しをしたりすることなく、単に母国語のみで話かけていけば、子どもたちにとっては留学生が何を話しているのかわからずかわりが生まれなかった可能性があったと思われる。

実践例 2

第 2 回交流 (10月) : 年長

場面 : 留学生が困った表情をしている

【背景】

弁当を食べた後、A児、B児が留学生のところにやってきて、「ねえねえ、見てて」と言い、アルプス一万尺をやって見せていた。留学生が笑顔で拍手をしていると、そこへ、L児がやってきて「一緒にやろう！」と言って歌い始め、手合わせをしようとした。

「僕が教えてあげたんだよ」

L児の誘いを受けた留学生が少し困った表情をし、首を振りながら手も振っている。どうやら『アルプス一万尺』の歌ややり方がわからないというジェスチャーのようである。L児が留学生の表情とジェスチャーを見て不思議そうにしながら離れていく。一人で佇んでいるL児

に教師が、「もしかしたらアルプス一万尺の手遊びがわからないのかもしれないから、教えてあげたらいいかもしれんよ」と声をかける。すると、L児が「あっ、そうか！」と言って留学生のところに急いで戻る。そして、「アルプス一万尺、教えてあげるよ」と言い、L児がゆっくりと歌を歌いながら、留学生の手と合わせようとする。留学生もL児の手と歌のテンポに合わせている。手合わせがうまくいかない時は、留学生の手を持って自分の手と合わせようとしている。ゆっくりではあるが、手合わせを最後まで通すことができると、L児が「ほら、できた！」と留学生に話しかけ、嬉しそうに手を握っている。留学生も嬉しそうにL児と顔を見合わせている。教師が思わず「すごい！すごい！」と声をかけると、L児が「僕が教えてあげたんだよ」と嬉しそうにしている。その後もL児は留学生に、『アルプス一万尺』の手遊びを教え続けている。

【考察】

留学生が困った表情をし、首を振りながら手を振るジェスチャーをしても、なぜそのようにするのか、自分はどうしたらよいかのかわからなかったのかもしれない。そのため、L児は留学生から離れて行ってしまったのだと推察する。ここで教師が、「もしかしたらアルプス一万尺の手遊びがわからないのかもしれないから、教えてあげたらいいかもしれんよ」と声をかけたことで、L児は留学生が「一緒にしたくてもわからなくて困っている」という状況を理解したのだと思われる。これをきっかけに、アルプス一万尺がわからなくて困っているのならば、どうすればわかってもらえるか、またはできるようになるかを自分なりに考え、ゆっくり歌ったり手を合わせたりするなどの行動をとったと思われる。

実践例 3

事例① 第 2 回交流 (10月) : 年中

事例② 第 5 回交流 (2月) : 年長

場面 : 言葉の違いから留学生に自分の思いや考えが伝わらない

【背景】事例① 第 2 回交流 (10月) : 年中

子どもたちが初めて出会う留学生に親しみがもてるように、留学生に質問ができる機会を設けた。これにより、多くの子どもたちからいろ

いるな質問が挙がった。

事例①「オッケーオッケー」

教師が子どもたちに「留学生さんに何か聞いてみたいことはある？」と尋ねる。M児が手を挙げ、「マレーシアにクワガタ（ムシ）はいますか？」と尋ねる。これに対し、留学生はクワガタが何なのかがわからず首をかしげている。その様子を見た教師が「クワガタがどんなものなのか教えてあげないと！」と伝える。すると子どもたちが次々に手でクワガタムシのあごの表現をし始める。それを見ても留学生はクワガタムシがわからないようである。そこで教師が「じゃあ、絵で描いてみようか」とM児に話してみる。するとM児がクレヨンを持ち出し、クワガタの絵を描く。それを見た留学生は、「オッケーオッケー」と首を大きく振りながら笑顔で答える。

続けてN児が、「じゃあ、カナブンはいいますか？」と質問をする。N児も絵を描いて説明しようとするが、うまく描けなかったため、身振り手振りで一生懸命カナブンの表現をし始める。留学生は「う～ん」と言っている。カナブンが理解できていないようである。すると、O児が図鑑を持ってきてページをめくり、カナブンが載っているページを開くと、それを留学生に見せる。留学生は、図鑑を見たことでN児が言っていることが理解できたのか、「オッケーオッケー」と言いながら笑顔で首を大きく振る。N児もO児も、自分たちの質問を留学生に理解してもらえたからなのかホッとしたような表情である。

【背景】事例② 第5回交流（2月）：年長

これまで続けて来園している留学生と最後の交流となる日、みんなでドッジボールをすることになった。この頃、子どもたちはドッジボールを好んでよくしていたため、留学生と一緒にできることを大変喜んでいた。しかし、留学生はドッジボールを知らないため、子どもたち自から留学生にドッジボールについての説明をし始めた。

事例②「オーケー」

園庭に出ると子どもたちが「ドッジボールはねえ・・・」と言いながら、ボールを投げたり取ったりする表現やコートを描くなどをして

いる。留学生は子どもたちがしていることを一生懸命見ているが、ドッジボールがボールを使った遊びであることは理解できたようだが、ルールまでは理解できていない様子である。すると、P児が地面に人が一人入れる程度の小さなコートを描き、ボールを持ったQ児とその小さなコートの中に入って「こうやって投げるんよ。それで当たらんようにするんよ」と言いながら身振り手振りを加えて説明を始める（図1）。続けて、R児が「こうよこうよ」と言いながら地面に、P児が描いたものよりも少し広めのコートを描く。更に「これが人でね・・・」と言いながらコートの中にたくさんの丸を描き始める。人差し指をボールに例え、コート内を行ったり来たりさせている。そして、「当たたらね、出るんよ」と言いながらコート外に向かって線を引く（図2）。S児も「出た人はこっちに向かってボールを投げられるんよ」と言いながらコート外から相手コート内に線を引く。留学生が「ウンウンウンウン」と言いながら大きく頷き、「オーケー」と言っている。S児が「よっしゃあ！これで一緒にできるよ」と言い、留学生の手を引き、みんなでドッジボールのコートに向かう。



図1 小さなコートに入って
身振り手振りでルールを説明



図2 地面にコートを描いてルールを説明

【考察】

事例①では、言葉が通じない留学生に自分の質問をしたいことが伝わらない中で、子どもたちが教師の援助を受けながら体で表現したり絵で表現したりして伝えようとしている。

また事例②では、交流を重ねてきているだけあって、留学生と自分たちが話す言葉が違うことを子どもたちもわかっているため、日本語だけでは伝わらないということは、よくわかっている。そのため、最初から地面にコートなどの絵を描いて説明していつている。

両事例において、子どもたちは互いの話す言葉が違っていても、伝えていくことをやめしまうのではなく、むしろ、自分たちの言葉が通じないのであれば、それ以外の方法を考えて粘り強く伝えていつている。そうした経験を積み重ねていくことで、将来、他国の人たちと接する時にも子どもたちは物怖じすることなく接していくようになっていくのではないだろうか。

実践例 4

第 3 回交流 (11月) : 年長

場面 : 留学生から「日本の子どもたちの歌や遊びが知りたい」という話がくる

【背景】

留学生が日本の遊びを知りたいということを知り、どの遊びを教えるかを子どもたちと考えることとなった。

「踊りの方がいいんじゃない？」

「留学生さんがね、日本の遊びを教えてほしいみたいけど…みんな、どうする？」と教師が尋ねる。「いいよー！」「氷鬼教えない！」「へびじゃんけんがいい！」「ヤンチャリカの踊りがいいじゃん！」「段ボールの基地で一緒に遊びたい！」などと、子どもたちは自分たちのやりたい遊びを口々に伝える。「いっぱい教えてあげたい遊びがあるよね。でも、いきなりそんなにたくさんは教えないからねえ～どうしよっか？」と教師が尋ねると T 児が「じゃあ、グループに分かれてから順番に教えたらいんじゃない？」と答える。それを聞いた U 児が「でも、一人 (留学生さん) なんじゃけえ、順番に教えても覚えられんよ。時間もないし…」と言う。「そーだよな。留学生さんが覚えられないかもね…困ったねえ」と教師が投げかけると「じゃあ、じゃんけんしてどれにするか決めたらいいじゃん！」と V

児が答える。「じゃんけん決めてるのー？どんな遊びだったら留学生さん喜んでくれるかなあ」と教師が再度投げかけると「じゃんけん決めてん方がいいよ！」と V 児が答える。「なんで、じゃんけん決めてたらいいのん？」と教師が尋ねると「だって、留学生さんわからんのんじゃけ、踊りとかのほうがいいよ！」と V 児が答える。「何がわからんの？」と教師が尋ねると「んーだって、教えるときに難しいじゃん」と V 児が答える。それを聞いた W 児が「だったら、踊りの方がいいね！そしたら、音楽があるけ留学生の人も歌に合わせられるけ、分かるじゃん！」とひらめいたように言う。「あー！なるほどね！音楽に合わせながらだったら、留学生さんも覚えやすいし、楽しいかな？」と教師が全体に尋ねると「たしかに一！じゃあ、踊りにしよ！」と子どもたちが賛成をする。すると X 児が「先生！じゃあ、朝来たときとかに、段ボールの基地を教えてあげたりしてもいいーい？」と尋ねる。「そーだね！みんなで一緒に教えるのは踊りにして、外で遊んだり中で遊んだりしているときは、自分たちが教えてあげたい遊びを教えてあげたらいね」と教師も答える。X 児は嬉しそうに「じゃあ、おれ朝の時にも段ボールの基地も教えてあげよっ」と嬉しそうに答える。

【背景】

みんなで留学生の C 先生に踊りを教えることになり、第 3 回留学生交流を迎えた。まずは自分たちが踊って見せ、その後、留学生にも教えるという流れを自分たちで考えた。留学生もある程度、見て踊りを覚えているようだが、一か所間違えているところがあった。

「なかなか教えるのって難しいね」

「先生、ここの踊りの部分 (自分で踊って見せる) が、C 先生 (留学生) が間違えているから、僕が教えてあげる」という Y 児。「そっか！じゃあ、みんなを代表して、ちょっと〇〇先生に教えてくれる？みんなは、あってるかなって見ておいてね」と教師が言う。Y 児は、前に出てきて留学生に間違っている部分を踊って見せる。見せ終わると「あぁっ」と留学生は言い、踊って見せるが間違っている。「ちがう！ちがう！」と Y 児は、両手でばってんをして見せる。もう一度、やって見せるが、なかなか伝わらない。今度は、留学生の横に行き、腰のあたりを

もって「こうやって回るんよ！あっちを見とくの！」と、見ておく方を指さす（図3）。「オーケー！オーケー！」と留学生も嬉しそうな顔で答え、みんなの前でやって見せる。

そして、留学生が間違えずに踊る。見ていた子どもたちも「できたー！」と口々に喜ぶ。Y児もすごく満足そうな顔をし、留学生とハイタッチをする。「なかなか教えるって難しいわ～」とつぶやきながら、照れている。



図3 留学生のC先生に踊りを教える

【考察】

子どもたちは留学生に教える遊びを自分たちのやりたい遊びばかり挙げていたが、教師が「どんな遊びだったら留学生さんが喜んでくれるかな？」と再度、問いかけることで留学生のことを考えて、遊びを選ぼうとする姿につながったのだと思われる。

また、踊りを教える時には、日本語が通じないため、ジェスチャーを使ったり、体や手をもって動かしたりと、考えながら留学生に教えている姿があった。更に、留学生のことを考えて何の遊びを教えるかを自分たちでしっかり話し合いをして決めたからこそ、Y児が教えている時には、周りの友だちも一生懸命見ている、伝わった時にはクラスみんなで喜ぶ姿につながったのだと思われる。

6. 成果と課題

本研究で新たに開発した留学生交流活動の成果と課題を活動内において設定した場面（表1）から述べる。

（1）成果

①日本語が通じない留学生と出会う：主体性・積極性に関する姿

この場面では、留学生からも子どもたちに積極的にかかわってもらった。留学生は、母国語

に加え指差しなどしながら子どもたちに話しかけていた。これにより、子どもたちは言葉の通じないことに当初、戸惑っていたが徐々に自然な形でやりとりが生まれ、子どもたちからかかわっていったりする姿が見られようになった。

②留学生が困った表情をしている：チャレンジ精神に関する姿

この場面では、留学生が困った表情をしていても、なぜ困っているのかに子どもが気づいていなかったため、教師が子どもに困っている理由を伝えていった。これにより、子どもが自ら留学生にとってよい方法を考え、考えた方法で粘り強くかかわる姿が見られた。

③言葉の違いから留学生に自分の思いや考えが伝わらない：チャレンジ精神に関する姿

この場面では、教師が「〇〇がどういうものなのかを（留学生に）教えてあげないと」と言葉をかけたり、絵で教えるように促したりしたことで、自分たちが伝えたいことを日本語に身振り手振りを加えたり、絵や図鑑を用いたりして懸命に伝えようとする姿が見られた。また、交流を重ねてくると年長の子どもたちは、教師に促されなくとも自分たちから地面に絵を描くなどして留学生に説明をしていた。

④留学生から「日本の子どもたちの歌や遊びが知りたい」という話がある：主体性・積極性、チャレンジ精神に関する姿

この場面では、クラス全体の場で話し合いの機会を設け、やりとりを重ねていけるようにしていったことで子どもたちが留学生のことを思い、初めてでもすぐに覚えられるものをみんなで考えて選ぼうとする姿が見られた。（主体性・積極性）

また、日本の歌の踊りをわかってもらえるように見本を見せたり、体に触れたりしながら丁寧に教える姿が見られた。（チャレンジ精神）

（2）課題

①留学生が困った表情をしている：主体性・積極性に関する姿

留学生が困っている表情に気づいても、自分から声をかけるなどしてかかわろうとする姿が見られなかった。

これに関しては、初めて出会う留学生に対する緊張やどのようにかかわってよいかかわらなかつたということが考えられる。今後は、そのような時の援助のあり方を探っていく、子ど

もたちが自発的にかかわっていけるようにしていきたい。また、設定した場面に対する具体的な姿として「留学生が困っていたら、『どうしたの?』などと尋ねながら自分からかかわっている」を設定したが、この内容について幼児期の子どもたちに沿うものであったかを検討していくことも必要であると考え。

②言葉の違いから留学生に自分の思いや考えが伝わらない：チャレンジ精神

言葉の違いから留学生に自分の思いが伝わらない場面で、自分の思いを言葉や身振り手振り以外の方法で伝えていく姿が見られた。そのため、どのような伝え方があるのかを教師が予測をしておくとともに、状況によっては伝えていくために必要な素材、道具を提示したり環境構成として用意しておいたりすることが必要だと思われる。

7. 実践を終えて

世界のグローバル化が進展していく中、これからは国際社会という大きな舞台で活躍できる人材を育成していかななくてはならないと改めて考えさせられた。グローバル人材の育成は、大学生や社会人から始めるのではなく、幼稚園の時期から始めることが重要であることも実感してきた。そして、各校種での積み重ねがあつてこそ意味があるものと考え。今後は、本研究で明らかになった成果を生かした留学生交流活動を行っていくとともに、課題についても改善していけるようにする。

また、グローバル人材の概念にあるその他の要素の項目にも目を向け、どのような交流活動を行うことができるのかを探っていきたいと考えている。

引用（参考）文献

- 1) 岩田他 (2015)「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅲ —大学と連携した研究開発システムの構築に向けて—」, p. 1.
- 2) グローバル人材育成推進会議(2012)「グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)」, p. 8.
<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf>.
- 3) 前掲書, p. 8.
- 4) 広島大学附属学校園研究推進委員会 (2014)

「社会のグローバル化に対応した初等中等カリキュラムの開発Ⅱ —大学と連携した研究開発システムの構築に向けて—」, p. 3.

- 5) 松村明 (1998)「大辞泉」, 小学館, p. 1276.
- 6) 前掲書, p. 1492.
- 7) 前掲書, p. 1717.
- 8) 文部科学省 (2008)「幼稚園教育要領」 p. 26.
- 9) 文部科学省「資料2 グローバル人材の育成について」, p. 2.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf.
- 10) 一般社団法人 日本経済団体連合会 (2013)「世界を舞台に活躍できる人づくりのために」—グローバル人材の育成に向けたフォローアップ提言—, p. 6.
https://www.keidanren.or.jp/policy/2013/059_honbun.pdf.